**コンゴ民主共和国だより**

　海外生活３５年後、コンゴ民主共和国から日本へ帰国して、早や７カ月過ぎてしまいました。コンゴでの最後の１７年間は、首都のキンシャサに住んでいました。仕事の関係で地方に出かける機会がたびたびありましたが、最後に訪れた隣のバンドウンドウ（Bandundu）州キクイト（Kikwit）市が印象に残りたびたび思い出されます。

キンシャサから飛行機で１時間半ぐらいで５００ｋｍ離れたところです。農業が主で大都会ではありませんが、市内に流れる大きなクイロ河の所為でしょうか景色の良い静けさの漂う落ち着いたところでした。

　そこには、イタリアに本部がある、ベルガモの貧しい人々のシスターズという修道会のシスター達が長年にわたって、医療、福祉、教育の分野で人々に奉仕していて、またそれを受けつぐ若いシスターたちが養成されていて活気のある生活をしています。私の属する修道会はその地方になくて、そのシスター達と知り合いになれたのはJOMASの曽野綾子前会長様のお陰でした。

話は、２００９年に遡りますが、曽野綾子氏が日本財団、医師、ジャーナリストの方々のアフリカの貧困調査団と一緒にコンゴを訪問された折、１９９５年にバンドウンドウ州　キクウイット市に突如エボラ出血熱という伝染力の強い伝染病が発生したその場所を訪問したいということで、わたくしはベルガモのシスター達と連絡をとることになりました。シスターたちは遠い日本の人々がエボラ出血熱に興味をもち、Kikwit（キクウイット）まで来てくれるというので大変喜び、感謝してくれました。

２００９年３月、調査団の一行は約２０人は古いソ連時代の恐ろしげな飛行機でキクウイットへ飛びたちました。ベルガモのシスター達に大歓迎されて、修道院に泊りました。キンシャサですでに専門家からエボラについての学習をして、いよいよ現地で生き延びた証人達の話を聞き、その場所を訪ねたわけです。

　１９９５年この平和郷に突如として発生した、伝染性の高い、高熱の出る病気が何処から、どうしてやってきたかが分からず、短期間で伝染し死者がでて、なすすべもなく犠牲者がどんどん増えて行くばかりで手の施しようがなかったのです。後で知ったことですが、それ以前赤道州のエボラ川あたりで当時より２０年前に発生したエボラ出血熱と知りました。大勢の死者の中、はじめから率先して、身を呈して治療、看護にあたったベルガモの６人のイタリア人のシスター達も早い時点で被患し、なくなりました。体の至るところから、血が吹き出し、高熱を出し、それに触っただけで、また汚れたものを洗濯するだけでうつってゆく恐ろしい病気に、住民たちはこのわけのわからない脅威にたいして悪霊の仕業と恐れ、近づくことも、話すこともましてや手伝うなどとはもってのほか、そんな中でシスター達の英雄的な働きに対して住民は尊敬と感謝を

持ち続けています。

そしてその後１５年経ち、ベルガモのシスターたちはこの６人のシスター達の英雄的な働きを思い起こすために、記念病院を建てることを計画し、JOMASに建設資金の援助を願ったわけです。エボラ出血熱のとき収容され、亡くなっていった国立の病院は古い建物で、もう修繕も出来ないような不潔なものになっています。修道院の近くにいくつもの村があって、病気になってもすぐに掛かれるような施設がないので、それはシスター達や住民の願いでもあったわけです。幸いにJOMASが多額の援助をして、病棟が２棟の病院が建ちました。

　それでこの手紙は振り出しに戻ります。ベルガモのシスター達から病院の建築が終わった知らせがあり、私は日本に出発する寸前に懐かしいキクイットを訪ねたわけです。病院は亡くなったまだ若かったイタリア人のシスターたちをしのばせる清楚で明るい感じのよい建物でした。丁寧な仕事でいろいろ工夫もされていて、住民もよろこんでこの病院を使っていくことと思われ、JOMASのお金がよいことに使われて、私もうれしくなりましたことをご報告いたします。このエボラ事件で九死に一生を得た８０歳をこえたイタリア人のシスターもお元気でした。私を迎えてくれた院長は当時まだ若く犠牲になったシスター達の看病や下着の洗濯をしたそうですが、うつらなかったということです、彼女はコンゴ人でした。

　以上、Kikwit　のKIKOTI の６人のシスター達の記念病院の模様をおしらせいたしました。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　マリアの宣教者フランシスコ修道会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　横浜修道院

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　中村　寛子　ｆｍｍ